

「……何だか、」

世界に二人だけみたい、

だね。なんて……ね？

ふふ、と、そう笑うものだから。

*

[金魚鉢で窒息する様な、]

夕刻を知らせる鐘が鳴る。

放課後の屋上は、昼休みと違い人気が無い。がらりと広がった空間、部活動の声さえもう
つすらと遠くに響く。

そんな、喧騒と隔てられたような空気の中だからこそ。

そっと吐かれた声は、そのままぽつりと落ちた。

「……」

生憎と、返す言葉は持ち合わせていない。もしも持ち合わせていたとしても、それは結局
返すことのない言葉になると分かっている。考えることを止めたのもとうの昔だ。

寝転んだままで、ちら、と一応視線だけそちらに遣ったが、案の定そいつはこちらを見て

はいなかった。ただただ、遠く見える校庭を眺めているだけだ。

穏やかに。

「……」

それ以上続く言葉も無い、再び目を閉じる。

見えなくなった夕焼け。時折腕を撫でていく風だけが、少しの冷たさを帯びていて、夕刻らしさを伝えていく。

以前、「夕方になると淋しさを感じるようになるのは、どうしてだろうね？」と、この声に投げられたことがあった。

あの時は、もう考えなくなっていた時だったか。確か「夜に引っ張られてるからだろ」と適当な声音で返した気がする。

普段は、そういう、遠回しなものだ。

だから、先程のあれは。

相当。

(らしく、ねえな。)

こういう時は危ないと知っている。何が危ないかって、——流されそうになる。

こいつは。普段から相当気を付けて、気を付けて、気を付けているのに。ふとした瞬間に素を零すのだ、無意識に。あまりに唐突なものだ、そんなもの、反射的に拾いそうになる。

拾ったら、考えたら、終わる。こいつもそれを分かっている。

互いにそうだと知り、互いに考えないことを選んだ。何も口に出さずに。ひっそりとぬるま湯の底に沈めた、形も定まらぬ澱のような。

溜め息を吐きそうになって、ぐ、と飲み込む。そっと、細く、微かな空気を逃すだけに留める。息苦しさは、ほんの僅かだ——息苦しい理由がこれだけではないとしても。

下校を促す鐘が鳴る。

空気の熱量が変わる。無事に戻った感覚に、気怠く開いた目に映る、

「っ、」

——ああ。

それは。

(終わりを悟り、顔を伏せる。)

(「いつも通り」に戻ったのに、あいつに驚いてしまった俺に、あいつは驚いて、
そっと目を伏せてから、
ゆっくりと、困ったような笑みで、俺に目を合わせて。)

【 金魚鉢で窒息するような、 】

(金魚は夕日の美しさに見惚れて、その朱を身体に写したのでしょう。)

(水の中でも、焦がれてしまっては、)

(溜め息を覚え、あっという間に溺れてしまうというのに。)

*

(1,093 文字)